



仏教看護・ビハーラ学会

Japan Association for Buddhist Nursing and Vihāra Studies

仏教看護ビハーラ学会 第9回年次大会報告

第9回年次大会は、平成25年(2013)8月23日(金)から25日(日)の3日間開催されました。本報告では、その概要をごく簡単に紹介いたします。

本大会は「生と別離を見つめて～自らの社会と文化の中で～」をテーマとし、式年遷宮の年に伊勢市・皇學館大学にて開催しました。この遷宮の意義をふまえながら、私たちが保持してきた文化と伝統を考え、本学会の趣旨を再考していく機会となることを願っております。

大会概要

名称：仏教看護・ビハーラ学会第9回年次大会

開催日時：平成25年8月23日(金)～平成25年8月25日(日)

開催場所：皇學館大学

〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704

参加者数 約140名(スタッフ、報道関係者等を含む)

大会長 宮城洋一郎(皇學館大学)

平野 博(松阪市民病院)

株本 千鶴(椋山女子学園大学)

第1日目は、エクスカージョンとして、式年遷宮の重要な行事である「外宮お白石持ち行事」の見学ならびに昨年開館された「せんぐう館」を拝観しました。この会は、20余名の参加を得て、案内は皇學館大学櫻井治男先生にお願いしました。「お白石持ち」とは、伊勢市の地域ごとに神宮に「お白石」を奉獻する行事です。奉獻に際して、大集団で「お白石」を運ぶさまは圧巻で、その勇壮な出で立ちに深く感銘したことです。

外宮の参拝を経て、同行事を見学の後、「せんぐう館」を見学し、緻密な細工や寸分違わぬ高度な技術の継承に目を奪われたことです。

第2日目は、皇學館大学を会場に講話、基調講演、シンポジウムを開催。まず、遷宮にちなみ皇學館大学木村徳宏先生から「伊勢の神宮と式年遷宮」と題する講話からはじまりました。ここで、伊勢神宮の由来、式年遷宮の歴史とその意義について、詳細な資料を手がかりにご説明いただきました。

特に、その中で「式年遷宮」がなぜ二十年に一度なのかについて、多くの場で語られていた「技術伝承説」を含めて六つの説があることを提示していただき、多面的に捉えていく必要があると提起されています。

次に、会場を隣接の「祭式教室」に移し、皇學館大学雅楽部の演奏



を拝聴することになります。この教室は、神職養成課程の柱とした同大学が誇る施設です。その教室で雅楽部のみなさんによる演奏がはじまりました。厳かな雰囲気の中で奏でる音色に参加者一同、深く感動したことです。特に、演奏者からそれぞれの楽器の特性や、装束について説明があり、伝統様式を継承させてきた文化の薫りを伝えてくれました。

この行事で午前の部を終え、参加者の多くは学生食堂で昼食を取り、大学に隣接する神宮徴古館などを見学されるなど思い思いに過ごしていただきました。

午後は、皇學館大学・櫻井治男先生による「神道と死生観—『超生出死』の意味—」と題する基調講演からはじまりました。まず、神道において「死」がどのように理解されてきたかを、「ある神主の最期」、「神葬祭」などを事例に分析されながら、神道における死生観の課題として①人間観・死の観念、②死後観、③死の対処法をあげられました。

これらの議論から、櫻井先生は伊勢神道の思想の中核にある「清浄」「正直」を手がかりに、度会家行『類聚神祇本源』（元応二年・一三二〇）に記す「超生出死」に注目されました。家行は、「清浄」とはひとつではなく、「一心不乱」と「超生出死」が「清浄」であり、「正直」であり、「混沌の始めを守る」ことだと主張しています。ここに、死を清浄の概念の中に取り入れたことで、これをどのように理解するかが問われることになります。これを日本思想体系本では「生を超え死を出ずる」と読むのに対し、「生を超え死に出ずる」との訓読を提起し、「生に執着せず、死すことも厭わない」との解釈を試みました。こうした理解を提起して、「混沌から出発し混沌に入る」という「死生同居」に神道が示す死生観があるのではないかとされました。

このように、死を神道思想家が捉えたところを拠り所に分析されたことで、多くの点で学ぶべきところがあったのではないのでしょうか。

【シンポジウム】

引き続き 13 時 10 分から 2 時間半にわたってシンポジウム「緩和ケアは死に向き合ってきたか」が行われました。シンポジウムでは、まず、本大会の大会長でもある平野博氏（松阪市民病院）から、次のようなシンポジウムのテーマ設定の理由が述べられました。



十数年前から緩和ケア病棟に勤務してきましたが、この数年間に、緩和ケアと呼ばれる領域の内容が変化してきていることを実感してきました。緩和ケアと呼ばれている領域は、1970 年代にターミナルケアに関する議論が提起されたことが、その活動の始まりでした。その後、ホスピス・緩和ケア病棟の増加にともない、1997 年に国内で初めて、「ホスピス緩和ケアプログラムの基準」が発効されました。その基準では「…治癒不可能な疾患の終末期にある患者…」と記載されていましたが、2009 年の基準には「病気の早い時期から適用し、積極的な治療に伴って生ずる苦痛にも対処する」を基本方針のひとつとされました。2013 年 3 月、緩和ケアに関わる、厚生労働省とりまとめ報告書には、「…早期からの緩和ケアを切れ目なく提供する…」という文章が記載されています。

こうした経緯から明らかなように、ターミナルケアから始まった緩和ケアの領域において、「苦痛の緩和」が強調されることで、死が遠ざけられてきたのではないかという見方ができるのではないのでしょうか。それはまた、利用者の認識の中にも、「症状緩和」を願うことで、死が遠ざけられてきているという印象を臨床現場の中で持つようになってきました。

もともとターミナルケア（死の臨床）には、「命の終わりに近付いて、自分の身体を思い通りに動かせなくなった時にふと考えてみると、周囲の人に支えられている事に気づき、生かされている事に感謝する」という意味があったのではないのでしょうか。

そうしたターミナルケアの当初の理念をふまえ、今回のシンポジウムでは、「死と向き合う」ことを議論の中心にすえて、考えてみたいと思います。

シンポジストとして登壇されたのは、田久保園子氏（東京ビハーラ・ボランティア、患者の立場から報告）、熊澤利和氏（高崎経済大学教授、遺族の立場から報告）、藤澤香津子氏（前・松阪市民病院 MSW、社会福祉士の立場から報告）、村越里枝子氏（諏訪中央病院緩和

和ケア病棟看護師長、看護師の立場から報告)、原敬氏(さいたま赤十字病院緩和ケア診療科部長、医師の立場から報告)、でした。各報告者からはそれぞれの経験と客観的な視点にいもとづいた、緩和ケアの現状や本質についての批判や問題点が報告されました。各報告者の報告の後に、コメンテーターの田宮仁氏からのコメント、フロントとの質疑応答があり、期待される緩和ケアと現実の緩和ケア、あるべき緩和ケアを考える視点についての議論が展開されたのでした。



【懇親会】

恒例の懇親会は、大学学生食堂を会場に午後6時より8時まで開催されました。藤腹明子学会会長の開会の辞があり、続いて開催校の皇學館大学・櫻井治男教授より歓迎の挨拶を頂き、学会顧問・大井玄先生の乾杯のご発声により会がはじまりました。また、会の半ばでは韓国から参加されたキム・ヘドさんのスピーチがあり、終始和やかな内に進行していきました。最後に株本千鶴大会長から閉会の辞があり、懇親会を終えました。

【分科会】

最終日午前のプログラムは会員による研究発表で、2つの分科会が設けられました。第1分科会は熊澤利和氏が司会を務め、6タイトルの発表がありました。

報告者とタイトルは次のとおり(報告順)。

佐伯典彦氏(社会福祉法人青山福祉会)「大好きな自宅で家族に看取られたM氏について」
石川麗子氏(戸田中央総合病院)「在宅看取りと向き合う家族への看護師の役割についての一考察—看取り体験を通じた夫婦のインタビューを通じて—」

吉田厚子氏・東承子氏(大日本仏教慈善会財団あそか第2診療所(あそかビハーラクリニック))「あそかビハーラクリニックの仏教看護『ぬくもりとおかげさま』—患者、家族との関わりを通して、いのちのつながりを学んだ1事例—」

森田敬史氏・多賀由美氏・板野武司氏・岡村直孝氏(長岡西病院ビハーラ病棟)「遺族調査からみえてくる仏堂の活用状況とその効果」

林妙和氏・後藤真澄氏（中部学院大学人間福祉学部）「高齢者介護施設における看とりと宗教との関わり―看護師、介護士、僧侶への聞き取り調査をもとに―」

山田祐子氏（松阪市民病院緩和ケア病棟）「患者さんの『死に向き合う』ことの意味を求めて」、

第2分科会でも6タイトルの発表が株本千鶴氏の司会によって行われました。

報告者とタイトルは次のとおり（報告順）

河本秀樹氏・佐藤成道氏（淑徳大学大学院）「現代日本における仏教や哲学に対する意識を探る試み―福祉専門職養成校の影響をてがかりにして―」

頼尊恒信氏（熊本学園大学大学院）「障害者の権利擁護と仏教看護・ビハラー真の共生社会の成立を願って―」

平尾真智子氏（順天堂大学医学部医史学研究室）「天台宗の僧靈應が著した寺子屋の教科書『看病手引歌』」

友久久雄氏・伊藤秀章氏（龍谷大学）「ビハラー活動研修生と大学生における生死の問題（1）」、伊藤秀章氏・友久久雄氏（龍谷大学）「ビハラー活動研修生と大学生における生死の問題（2）」、東越拓也氏（長岡西病院）「介護福祉士養成における『看取りのケア』に関する教育の必要性について」

いずれの分科会においても会員の研究成果にたいして活発な質疑応答が行われました。そこであらためて感じられたのは、ビハラーや仏教看護におけるケアを支える価値とは何かという問いに対する探究の必要性でした。今後の会員の研究テーマとして深化してゆくことを期待したいと思います。

まとめ

第9回年次大会は、3日間で約140名の方々のご参加を得て終了することができました。この間、不慣れなために種々行き届かないところがあり、会員の皆さまに、謹んでお詫び申し上げます。

この大会を引き受け、具体的な準備に入ってから約1年、この間、皇學館大学櫻井治男先生には、多大なご支援とご助言を賜りました。ここに深甚の謝意を申し上げます。また、今大会のために駆けつけてくださりました上越教育大学、淑徳大学の学生、院生の皆さま、開催校である皇學館大学の卒業生、院生の方々には、献身的に関わってくださり、心からの御礼を申し上げます。

第9回年次大会を終え、次の第10回大会につながっていくことができ、安堵しております。こうした継承は、学会活動の原点であります。さらなる蓄積を心から願い、報告とさせていただきます。